慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	板倉与一氏 政治経済学の方法
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.9 (1942. 9) ,p.799(77)- 806(84)
JaLC DOI	10.14991/001.19420901-0077
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420901-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

能因特に土地に分つたのであるが、(Traité d'économie politique, tome I, 1803, Livre Premier, chap. i-v.)、ボアローは更らに明確に其の生産論中に於いて、「富の泉源として考察せられたる土地」、「勞働」、「資本」及び「土地、勞働及び資本の聯合作用」に就いて述べ、(Bk I, chaps. iii-vi.)、次いで、人格的勤務及び政治的制度、價値、交換の一般的媒介物、並びに價格を論じたる後に於いて、「勞働の賃銀」、「資本の利潤」及び「地代」に就いて說いてゐる。(Bk I, chaps. xi-xiii.)。而して、彼れは第三編分配論に入つて、國民的所得の最初の分配に於ける相伴者、全收益が生産に於ける協力者等の間に分配せらるゝ割合、並びに最も有利なる本原的分配に就いて述べる。(Bk III, chaps ii-iv.)。

ボアローは、第四編消費論に於いては、セイ以來の傳統を繼いで、「消費するは物の效用又は價値を全部若しくは一部破壞するに在る。そは或る物に價値を與へつゝある生産の反對である」と說き、(p. 341.)、「公消費」及び「公消費の泉源」等に於いて財政論に說き及んでゐる。財政的論述は又第二編末に於いても看出される。

ヤーコッブの書の「修正」(Ueberarbeitung) たる本書は、多くの影響を英國經濟學界に與へることなくして、何時しか「殆んど忘れ去られた著作」(an almost forgotten work) となつて了つたのである。(Kaulla, a. a. O., S. 207; Edwin Cannan, A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848, p. 183.)。英國經濟學は猶ほ長く獨逸經濟學から重要なる影響を與へられることなくして過ぎたのである。

板垣與一氏「政治經濟學の方法」

氣賀健三

現代の我が國は强烈なる實踐的意欲に滿ちたる知性を要求してゐる。

然るに從來の理論經濟學に於ける存在と當爲の論理的分離は、その經濟理論から實踐的性格を奪ひ去る如くに見えた。今日の我が國やドイツに於て有力となりつゝあるゴットル流の經濟思想は再び科學的客觀性の名において實踐的なる理論を建設せんとするものであつて、いはゆる政治經濟學的思潮は即ちその一つに外ならない。

然るにかゝる企だては、從來の經濟理論的思惟の立場に立つ限り成功せざるものとされ、考へ方それ自體、學問觀それ自體を根本的に變へなければならないといふ出發點から出直すことを必要とした。

この樣な根本的要求から新しい經濟學を確立する眞劍な努力の結晶を我々はわが國においては既に酒枝義旗氏の「構成體論的經濟學」(昭和十六年)に見る。此書に於て氏はゴットルの本旨に則り、氏自身の眞劍な體驗反省を通じて新しき學問への荊の道をきり拓かれた。私は嘗て本誌に於て同書の短評を試みたが、其際にも記しておいた如く、價値判斷に關して必ずしも滿足し得なかつた。端的にいへば構成體それ自體の是認の中に、その現實的な正しさを前以て豫定してかゝつてゐる感を受けたのである。併し此書物によつて我々がゴットル的思惟の核心を知り得たの

は大いに感謝する所であつた。

こゝに紹介しようとする板垣氏の「政治經濟學の方法」（昭和十七年、日本評論社）は同じくゴットル的立場に立つとはいへ、ある意味で酒枝氏の著とは對照的である。即ち後者が「體驗、反省」を以て貫かれてゐるのに對し、前者はむしろ頭腦的思辨を以て一貫してゐるのである。私は勿論こゝに思辨がいゝとか悪いとか、反省があるとかないといふのではない。たゞ同じく政治經濟學の樹立を目指しながら、人によつて著しい行き方の相違を興味深く思ふのである。

板垣氏の著書の中心も價値判斷を内に含んだ經濟學即ち經濟政策學の樹立にあることは其著の冒頭にかゝれた通りである。而して氏が開拓する途は先づ第一にハイデッガーの存在論によつて、從來分離して考へられてゐた主觀と客觀との統一的理解乃至は主體的存在の客觀性を基礎づけることであり、（同書第一章及び第二章）第二はゴットルの構成體又は形成體理論をかりて、主體の構造を明かにすることであり（同書第四章）、第三にはリストの發展段階的構想を取入れて、主體の歴史的實踐を把握する手掛りとしようとする（第四章及び第二部）ことである。

全篇を通じて此三人のドイツの學者の思想が、著者の政治經濟學理論として統一されてゐるかどうかについては必ずしも疑ひなしとはいへぬであらう。併し著者が現代の國家的生活の危機に際會して、飽くまでも、實踐的なる經濟理論を追求してゆく筋道は之を親知することができる。

政策的認識の客觀性は主觀を認識の對象と區別し、その外に之を置く所のカント主義特有の二元論的解釋によつては得られない。然るに存在論の説く所は、先づ論理的に對象を取り上げる前に、更に一歩溯つてハイデッガーのいはゆる「人間的現存在」をその現存在に於て把へる。現存在は常に一つの存在の仕方であり、それは既に在りたるところのものであると共に現に在るものであり、又在り得るところの凡てゞあるといへる。之によつて一般に學問的認識も亦「世界内存在」の一つの存在の仕方であることを免れることはできず、而して現存在の認識は現に在るものゝ觀想的認識でなく、現に在ることが同時に既に一定の可能性の中に投げ込まれてゐることを含む意味に於て、その「歸趨聯關」又はその「有意義性」を「理解」することでなければならない。こゝに實踐的認識の存在論的根據が求められる。

著者は更にハイデッガーに頼り、ハイデッガーの用語を以て「投げ込まれた可能性」「被投企的投企」の實存論的構造を展開し、それがある一つの「環境」又は情況に際して「決意」として現れ、自己の全體存在可能へ「前走」するものであり（前走的決意性）、之を「時間性」に於て統一して考へる。（時間性とは「決意性が將來的に自己の上へ歸來しながら現前的に情況の中へ自己を置き、既存は將來から、又既存する將來から現在がでゝくるといふ意味で統一された現象を指している」同書九三―九四頁）。

かやうな實存論的見地に立てば、實踐それ自體は豫め論理的に定立されたる目的概念を必要とせず、目的なき手段の合目的性が考へられるといふ。蓋し合目的性は此立場よりすれば論理的に考へられる範疇ではなくして歴史的生起の構造より理解されるからであり、それは即ち實存とも呼ばるべきものであるからである（一一一頁）。

ハイデッガーの言葉の難解な譯語による實踐的行爲の客觀性をこゝに略述することは容易ではないが、兎に角かゝる存在論的基礎づけのみを以てある政策的認識の客觀性が直ちに證明された譯ではない。

我々が日常に體驗し、平常に見る所のある一つの歴史的社會的情況に於てどの樣にして一義的にある一つの存在の仕方の中に「固有の」實踐が行はれるかといふことはかゝる哲學的基礎づけのみを以て明かにされてゐない。一つ

の情況は「歴史の流れ、社會のどよめき」の中に在るのであるならば、その自ら作り出すどよめきの中に、どよめきを動かしてゆく實踐的目的の固有の客觀性を求めるといふことは、たゞその言葉からは解決せられないであらう。そこである存在の仕方の本來固有なる可能性とは何かといふことを改めて問はずにはいられない。

客觀に對立した意味で使はれる主觀といふ言葉の代りに、主體といふ言葉を用ひて、本來可能の存在の仕方を明かにしようとするのが、いはゆる主體性の論理である。

「主體」と「主觀」とは勿論單なる言葉の相違だけに止まるものでなく、その意義の相違が寧ろ重要である。即ち後者は認識論的、論理的範疇であるのに對し、前者は實存的、政治的概念である。著者の主體性の見解は主としてゴットルの形成體又は構成體（Gebilde）の立場に立つものであつて、國家的單位における人間の共同生活の全體的統一體を意味するものと考へられる。併し此場合形成體の概念がゴットルや酒枝氏における如く人間共同生活の最も基本的なる存在として、超歴史的に本質的なるものと解せられてゐるのか、或ひは現代の歴史的時代性の性格として考へられてゐるのか明かでない。例へば國民經濟が主體的統一體として包括形成體であるといふのは、特に現代の我が國の姿について現實にそうであるといふのか、又歴史的社會的情況に固有なる一つの存在の仕方としてそうでなければならぬといふのか、又更に形成體的解釋は人間共同生活の本質であつて、歐洲や東洋の各國に於て中世に於ても、或は又資本主義的市民社會の成長の時代にあつてもそうであつたのかどうかは明瞭に規定せられてゐないようである。蓋し著者は形成體としての國民經濟は現代において初めて「眞の成立」を見ると解し、それに先立つ時代はたかゞ「國家經濟」の域を出でぬものか、又は「社會經濟」の時代に過ぎなかつたのであると說くが（同書序說第五節參照）、併しそれは生活共同體の一つの時代的あらはれとしてそうであるのか、ゴットルにおける如く超歴史的な本質において形成體なのであらうか。――此點に關し同じゴットル學派に立ちながら、國民經濟を以て形成體とは考へず寧ろ一定の政治的地理的領域内において相互關係に入りこむ經濟の複合に過ぎないと見る對照的見解もあるのである――。

ゴットルに在つては價値判斷の客觀的規準たる存在論的價値判斷は彼の獨特の言葉を使へば構成體としての「存在の正しさ」、「生活としての正しさ」に依存するものとされる。その内容とするところは、人間の共同生活體の「生活促進」といふ意義をもつことであるといふ。然るにしば〳〵指摘されるやうに、「存在としての正しさ」とか「生活促進」といふ抽象的な表現を以て何が具體的に理解せられるかは少しも明瞭でないのであつて、我々は之を以て政策原理が解決されたとは承認し難いのである。

著者においても、この存在論的價値判斷に關するゴットルの態度を慊らなく思はれる如く、主體的活動の客觀性――著者の用語によれば主體の「國家原理」と「政策原理」を政治的に統一するものを――「歴史原理」による媒介を通じて現實的實踐的に具體化しようとする。この爲にもつてこられるものが即ちリストの歴史的、實踐的認識としての經濟發展段階論である。著者はゴットルの眼を以て――リストの學說そのものでない――「リスト的問題」を見直し、リストによつてゴットルを鍛へ直さうとする腕を振はれる。

こゝに「リスト的問題」といふのは、私の理解にして誤りなければ、國民經濟の主體性の把握が、動的であること、即ち「國家的形成及び經濟的形成の原理が常に作用と生成の過程の中に捉へられ、歴史的實踐的情況の客觀的認識の下に捉へられる」（三四八頁）といふことであらう。今少しく具體的にいへば、國民經濟の主體性を表すものとは、リストのいはゆる全體的なる「國民的生産力」の概念であり、しかも、その「國民的生産力」の生産といふ實踐的形成

的な考へ方が彼の思想を貫いてゐるのである。

惟ふに、歴史的情況意識に基づいた、實踐的形成的思想といふことについてのみいふならば、リストの對立者たるアダム・スミスに於てもよく之を見ることができるのではないであらうか。「際立つて感熱した」といはれるリストの「歴史的情況意識」にも拘らず、彼の育成貿易論も農業産物自由貿易論も、ドイツの現實の政策とならなかつたのは何を物語るのであらうか。又彼のいはゆるスミスの世界主義は國民的體系を樞軸とする發展段階理論によつて之を解決せんとしたにも拘らず、發展段階思想それ自體が一種の自然主義的、世界主義に陷つてゐるのは反省されなければならぬ。

著者はリストの意義を彼の經濟理論に求めないで、寧ろ時代の制約を超へる所の獨自の問題提出の仕方に求められる。即ちそれは「歴史」を媒介とする特殊偏向的なる政策と一般普遍的なる理論との統一といふ考へ方である。こゝに歴史とは國民の歴史であり、理論、政策、歴史の三者の統一とは政治的、國民的統一としての國民經濟的發展、形成であるといはれる。國民的生産力の理論とはかゝる考へ方の一表現に外ならないといつてよいであらう。而してかゝる生産力を發展的に捉える爲には、何等かの形に於て「發展段階論」を必要とする。著者はリストの段階理論をば、發展思想として受取らずに、「歴史的實踐的認識の構造原理」として之を救はうとする。而して曰く「リストの段階理論が合理主義であつたのは呼吸せる時代のヨーロッパの確信をあらはすものにほかならない。リストも亦時代の子であつた」（三九六頁）と。彼の思想が歴史的所産であつたといふことは、著者に於いて彼の思想の時代を超へる性格を賞揚する爲にも、同時に又彼の思想の缺陷を是認する爲にも使はれてゐる。

段階理論をば新たに「歴史的構想力」の理論として、「歴史意識の具體的實踐的構造を示すもの」として息吹きを與へようとする著者は、いかなる段階理論を考へて居られるのであらうか。その解答は未だ此書に於て與へられてゐない。單に示唆的に「具體的な段階情況においてのみ歴史原理に媒介せられたる政治判斷力が」、「歴史的政治的段階理論」が新たに考へられなければならぬといふに止まる。

ある一つの具體的歴史的情況に於て政策的理論を規定する「歴史原理」とは一體いかなるものであらうか。著者が「歴史原理」といふ言葉を以て何を考へてゐるのか私には全卷を通じて汲みとることができなかつた。ある一つの具體的歴史的情況は存在の一つの仕方であるに違ひはなく、我々の思想が總て時代的制約を受けてゐるといふことは何人も爭はぬ程自明の事柄である。而してたゞそういふ丈けでは少しも存在としての正しさ、存在論的價値判斷の基準が示されたことにはならない。ある仕方に於て歴史的に存在することを「是認」するには、それが正しく存在するといふことの客觀性が證明されなければならない。而して正しさそれ自體を矢張り歴史の内に求めなければならぬとすればかゝる循環論的構造に於て、「歴史の流れ」、「人間生活の巨大な流れ」、「社會のどよめき」の中の存在の本來の固有の可能性を明かにするものは、著者のいふ「歴史原理」の役目となるのであらうと思はれる。著者が考へてゐるのであらうと期待される段階論的なる歴史的實踐的構造の具體的展開を、著者より期待してよいであらう。

「殊に實踐を重んずる著者に對して！」

此書の全篇を通じて認識論的立場に向つて隨所に放たれる批判を眞に效果的たらしむるのは、著者の提唱する存在論的實踐的方法が、より具體的に日本的經濟學の爲に著者によつて實踐される時である。

猶ほ序でに一言するならば、卷末の附錄につけられた「大熊博士の本質理論」の批評に關し其後半（四一七頁以下）の批判の趣旨に私は贊成するものであり、嘗て他の機會に殆ど同一の批評を簡單に發表したことがあるが、そう思

につけても、殊に歴史的具體性を尊ぶ著者が何故に、たゞ擴大されたる行爲の形式原理を理論と政策の統一原理として高く買はれるのが私の頗る奇とする所である。配分の原理を以て理論と政策の統一であると著者が是認するならば、存在論にまで遡つて理論と政策の統一に苦心せられる意味は一體どこにあるのであらうかと改めて問はざるを得ない氣がする。

以上に於て私は極めて簡單な紹介をしながら若干の疑問を提出した。著書よりの引用が餘り簡單であり、著者の眞意を誤解してはいないかを惧れるものであるが、私の懷疑的態度は決して此書を低く評價せんが爲ではなく、學ろ反對に、私自身之によつて大いに反省する所があり、示唆を受けたるが故に外ならない。たゞ其論じ方が頗る抽象的であり、具體的な歴史解釋による實證にまで及ぶことが殆どない爲、實際に體驗反省的に理解し難いのである。譬喩は餘り適切でないかもしれないが、マルクシズムに譬へていへば、唯物辯證法の哲學だけあつて、唯物史觀も、資本論も未だ展開されてない（又は暗示に止まる）といふ樣な感があるのは私だけであらうか。固より一冊の著書に一つの學問體系の全體に亙る完成を求めようとする譯ではないが、學問の革新を叫び、在來の經濟學の根本的變革を聲高く要求する著者に對して、ある程度の具體的、歴史的實踐を經濟學本來の領域の中に期待することは許されてよいと思ふのである。而して私自身としても政策論の性格について、歴史の意義について、頭を惱しつゝあるのであつて、著者板垣氏の解決の仕方に多大の期待をかけてゐるのである。

前號目次

（第三十六卷八月號）

原料資源問題について……加田哲二

作業勞働に於ける協同形態について……小高泰雄
——經營組織論研究の一節——

現代經濟學理論概況……高橋誠一郎
（昭和十七年六月二十五日慶應義塾經濟學會講演）

ジョン・ウオルター・ウッド著
「空港—設計諸要素の一端と將來の發展」……三邊清一郎

購讀料
一部　金五拾錢　郵稅金貳錢
半ケ年分　金貳圓九拾錢　郵稅金拾貳錢　（停）
一ケ年分　金五圓四拾錢　郵稅金貳拾四錢

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所へ
營業に關する用件は發賣所へ
原稿締切期日は發行前月十日

昭和十七年八月二十五日印刷納本
昭和十七年九月一日發行
毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第六十三卷第九號

編輯兼發行者　東京市芝區三田慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五ノ四二　金子活版所（電話赤二三九四）

發行所　東京市芝區三田慶應義塾內　理財學會
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發賣所　東京市芝區三田二ノ一　慶應出版社（電話三田（45）二七九一番　振替東京一五八一八〇番）

購讀申込は慶應出版社へ